

長生村社会福祉協議会長賞

静岡県／67歳／男性／無職

ますだ こうじ

増田 浩二様

✉手紙の相手：亡き妻

二歳のコウタは毎晩寝る前に、君の遺した絵本をパパに読んでもらっているよ。四歳のサヨは、家に遊びに来ると君の絵本の本棚の前にずっと座っている。いつまでも君のことを覚えていてほしい。確かに今は、彼らの心の中で「ばあば」がちゃんと生きているから。出会ったのは、初めて勤務する小学校の校長室で、新人は君と僕の二人だけだったね。「一年生か四年生を担任してもらいます。一年生はゼロからのスタートなので大変です。どちらを希望しますか」そうおっしゃる校長先生の前で君は黙ってうつむいたままだったから、「僕が一年生をやります」と、かっこつけて言ってしまった。でも、これが大きな間違いだと気づいたのは一か月後。絵本集めが好きで、幼稚園での実習経験があった君は一年生の担任がぴったりだった。逆に僕は高学年の方が合っていて、結局、君に手取り足取り一年生の授業の仕方を教えてもらったね。

四歳の娘の病気が治せないものだと思った時、「すぐに仕事を辞めてこの子とずっと一緒にいたい」と君は言った。でも、悩んだ末に仕事を続けたのは、もし治療法が発見されたら高額な医療費がかかるだろうと考えたから。時々「なぜ自分の子を放っておいて、よその子の世話をしなくちゃいけないの」と泣いてたのは知ってる。でも、「医学が発達する日まで絶対に私がこの子を生き延びさせる」と君が頑張ってくれたから、お医者さんから長生きさえ諦めると言われた娘が今も元気で、二人も孫を産んでくれたんだよ。時々「じいじ、絵本読んで」と言われるけれど自信がないよ。君は、本当に読み聞かせが上手だった。僕にはとても真似できないけれど、ちよつと練習しようかな。もうすぐ孫たちの誕生日だね。今年はどんな絵本を贈ればいいだろう。夢の中でも、お化けでもいいから出てきて教えてくれないかなあ。孫たちは、君が来ているのが時々見えるらしい。僕も、もう一度、君の優しい声が聴きたい。

〈手紙への想い〉

去年は頑張っている妻を応援するつもりで書きましたが、今年は、本当に大事な人だったのだと今更ながら気づいたことと、感謝の気持ちを込めて書きました。